

冬の教育研究発表会の振り返り

第3・4学年複式国語科

単元名：聞き手の頭の中に情景が浮かぶように

語ろう～ストーリーテリングに挑戦～

教材名：第3学年「モチモチの木」

第4学年「初雪のふる日」

授業者：平井千恵

本時（本実践）の主張点

「声」に着目することで、地の文や会話文から情景を想像し、登場人物の人物像や心情、物語の伏線に気付いて物語を主体的に語るができるであろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの自己調整

本時における授業づくりの「しかけ」

・本時は登場人物の変容を捉えさせるために始めと終わりの文や繰り返し出てくる歌を比較する課題を設定した。

第3学年

【めあて】

物語の始めと終わりを比べて、より聞き手に情景が浮かぶ語り方にする

【学習課題】

始めと終わりの一文の語り方について話し合う
上記の課題を学習メニューに記し、配布した。

子どもたちは、それぞれの一文の語り方を考えた。（図1・2）

初め
口調・・・あきれている「どうしてそう億病なんだ！！！！」強く言う。
「まめたほどおくびょうなやつはない」の、「ない」が、「なんで？」と言っている様な感じがするから。（言い方が）
ひょうじょうは、驚いている 表情である。豆太の億病さに、驚いている？
終わり
おちついた口調

「よかったね」

図1：子どもの一人学び①

初め
偉そうな口調

だめすぎてあきれてる

終わり
優しい感じの口調
冷静な口調

でいさるん
だいたい

図2：子どもの一人学び②

図1・2のように、子どもは始めと終わりの一文について、その前後や言葉から口調と表情を考えている。一人一人が頭の中で想像したことにしっくりくる言葉を選択して表出していることが分かる。この時点で、叙述から想像したことについて自分の考えをもつことはできている。また、同じような言葉を選んでいることから、それぞれの微妙な言葉の捉え方の違いやその言葉を理由について詳しく検討することはなかった。これは、口調と表情が同じような言葉を選んでいるため、その言葉を選んだ理由に関心を示さなかったためだと考えられる。同じ言葉の中にも理由が違うことがあるという感じ方の違いについて比べながら検討する子どもの姿を期待したが、これは今後の課題であると感じた。また、本時のしかけでもある学習課題に対する意識も低く、比べることによって見えてくることについての検討がなかった。学習課題というしかけがうまく機能しなかったのだ。そこで、教師が介入し、「始めと終わりを比べてどう？」と問うた。すると、「語り手の口調や表情がガラッと変わった。」という発言が出た。そこで「どこから語り手は変わったの？」と問うと、「豆太がはだして表戸をふっとばして走ったところがきっかけでガラッと語り手の気持ちが変わった。」ということに気付いた発言がでた。ここでは、それまでに子どもたちが考えていた終わりの一文の「穏やかな・優しい口調」という両方の理由に出ていた、おじいさんの腹痛が治ったか

らという理由と比べさせるとさらに深まったと反省が残る。ここでも比べるという視点が子どもからは出てこない。学習課題に「比べて分かったことを話し合う」などのように、「比べて」と入れるべきであった。今後は、このような比べるということを自ら調整し、検討し合える子どもにするため、教師側がさらに意識して、子どもに伝えていく必要があると考える。また、本校の研究で子どもに身につけさせたい調整行動での第3学年の

習得レベル	
1	知らないからできない
2	知っているけどできない
3	意識すればできる
4	意識しなくても当たり前に見える

図3：習得レベル

指導の手立て(例)	
●	目的、意味、方法を教える
□	調整行動について説明し、理解させる。
●	訓練する場や機会を与える。
□	調整行動を行う授業をデザインする。
□	調整行動を促す(言葉がけをする。役割を与える。など)
□	調整行動を繰り返させる。
●	調整行動への意欲を高める。
□	調整行動を価値づける。
□	調整行動のよさを感じさせる。
□	自己評価、相互評価をさせる。

図4：指導の手立て

子どもたちの「課題を把握する」の習得レベルでは「2知っているけどできない」、または「3意識すればできる」段階であると考えられるため、教師側が意識し、自己調整で

できる力を育てるためのアプローチである訓練する場や機会を与えていく必要がある。

しかし、本時のまとめについては、登場人物の変容をふまえて「はじめとおわりの豆太の行動に目をつけたら、豆太と語り手の気持ちやせいかがわかっているのが分かった。」と文章化ができていたため、学習のまとめを作る時に必要なめあてに沿ったまとめを作るという自己調整は働いていたと考えられる。

第4学年

【めあて】

物語の始めと終わりを比べて、より聞き手に情景が浮かぶ語り方にする

【学習課題】

繰り返し出てくる歌の語り方について話し合う
上記の学習課題を記した学習メニューを配布し
3年生と同様に4年生も、それぞれの歌から想像した語り方を言葉に表しそれについて検討した。

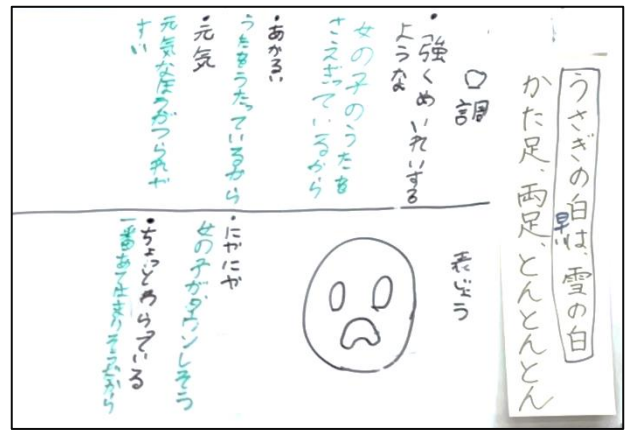


図6：第4学年 板書前半

4年生は物語の出てくる7つの歌から3つを選び、その語り方について考えた。一人学びの時間では3つ全て考えることが出来なかったため、考えた口調と表情を出し合い、それについて話し合った(図6)。話し合いの途中に、「うさぎの白は雪の白、かた足、両足、とんとんとん」について全員話し合うのか次の歌に進むのかという意見が出た。その時に、一人の子どもが「今日のめあ

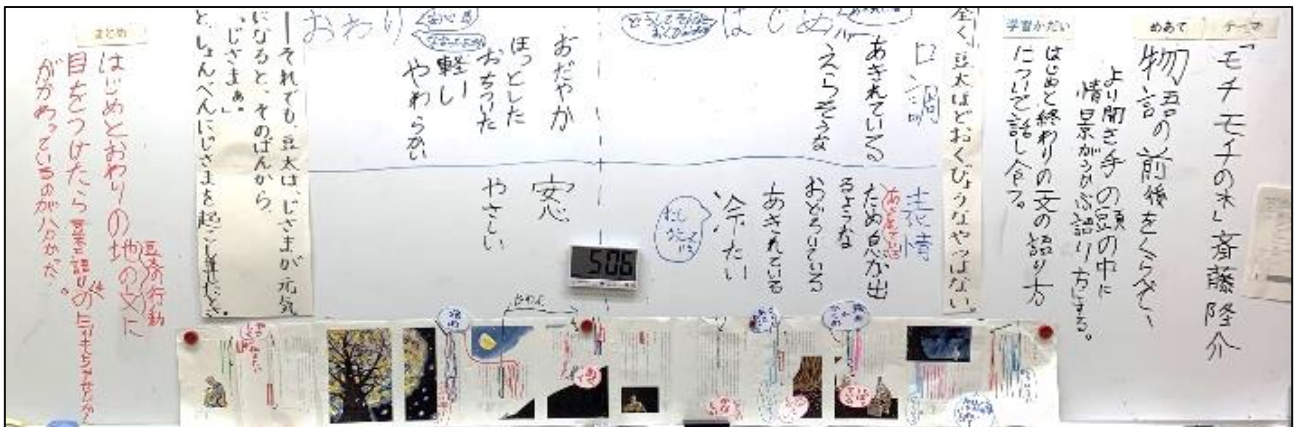


図5：第3学年 本時の板書

ては歌を比べるだから、次の歌にいった方がいいんじゃない？」と発言し、全員がそれに納得する形で違う歌の語り方についての検討が始まった。ここでは、3年生では見られなかった比べるということができており、「課題を把握」して学習を進めるといふ調整行動ができています。

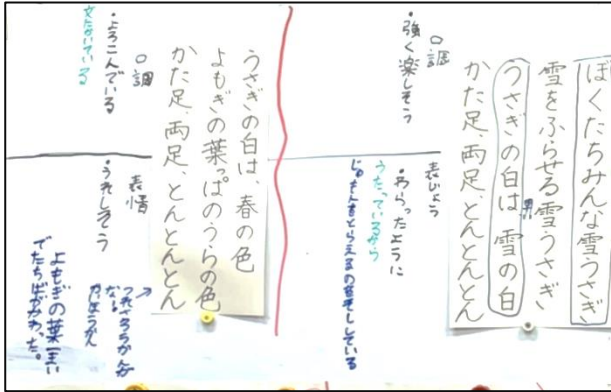


図7：第4学年 板書後半

また、話し合いが進む中で「ぼくたちみんな雪うさぎ」と「うさぎの白は雪の白」の歌はほとんど同じだという気付きも出ていた。記録者もその気付きを受け、「うさぎの白は、春の色」の前で赤線を引いている（図7）。さらに、その後の話し合いの中で3つの歌を比べたところ「うさぎの白は雪の白のところは、女の子が雪うさぎにつられてて、うさぎの白は春の色のところは、女の子にうさぎたちがつられてる。」「逆になったって意味か！」「よもぎの葉一枚で立場が逆転したんだけど。」という発言が続いた。この物語のクライマックスについてうさぎの視点ではあるが、変容を捉えたのである。これは授業者の予想を超える発言であり、歌の語り方の検討により、変容を捉えることが出来た瞬間であった。第4学年には学習課題というしかけがうまく働いたことが見て取れた。まとめの段階では、せっかく気付いたこの変容に触れずに、単元全体、または他の物語にもつながる汎用的なまとめになりかけたため、そのまとめは他の物語にも使える素晴らしいことだと価値づけた後、教師が本時の学習につかえるまとめの型を与えることになった（図8）。

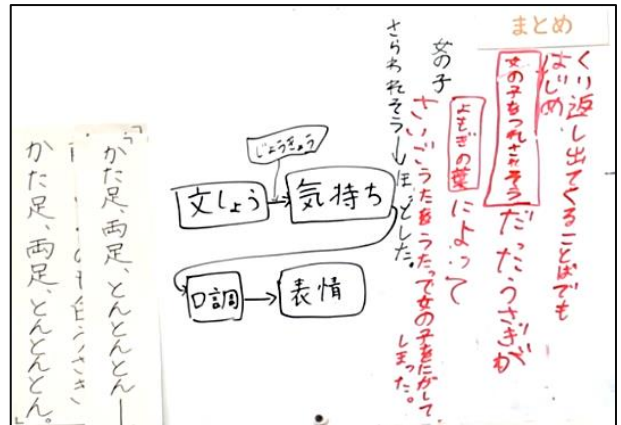


図8：第4学年 まとめの板書

しかし、本時のまとめについては、3生と同様に、登場人物の変容をふまえて「はじめ、女の子をつれさろうとしていたうさぎが、女の子とよもぎの葉によって、さいご女の子ににげられてしまった。」と文章化ができていたため、学習のまとめを作る時に必要な自己調整は働いていたと考えられる。

2. 成果と課題

本学級は、複式学級であるので、同じめあてを提示することで、2つの授業を見比べることができる。今回、4年生は「比べる」ことでうまく違いを見出していたのに対し、3年生は教師の介入なしでは違いを見出すことはできなかった。それについて、3生が学習課題を把握していなかったというよりは、把握しきれていなかったという方が正しいように感じた。「比べる」ということを学習課題に挙げていても、「比べる」という行為自体をどのように受け取り、どのように活動するのかで「比べる」という活動自体が変わってしまうのである。本時後、「比べることで何が分かるのか」と子どもたちに聞いた。すると、「違いが分かる」と4生が答え、それに3年生が納得し「同じことも分かる」と発言した。そして話型①「A… Bは…」②「Aは… 一方Bは…だから…」を示し「どちらを使うと比べたことが分かりやすいのか」と聞いた。ここでは全員が②を選んだ。すると、3年生の子どもから「私たちがしてたのは一つ一つ言っただけ

だったね。比べていなかった。」と比べていなかったことに気付いた発言が出たのである。これまで「比べよう」という言葉を出すことで、授業者は②の思考で話し合おうと思い込んでいたのだが、3年生の中にはまだ「比べる」という行為とその意義が備わっていなかったことに「比べる」について聞くことで気付かされた。つまり、3年生には「比べる」という思考は習得レベルの1または2であったのである(図3)。言葉では知っていることを使えるのかどうかを授業者は見とる必要があり、思考の方法とメリットについて理解させてから取り入れていくことが重要であると学んだ。今後は、発達段階を踏まえながら、一つ一つの言葉の意味や使い方を子どもたちと共通理解し、授業づくりをしていこうと思う。